不定期刊行　　第 351 号　2010.04.28

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
池田工業高等学校

山岳部員は増えている・・・長野県山岳総合センターの調査研究まとまる

４月２４日土曜日付けの信濃毎日新聞に掲載された「高校山岳部」関連の記事をお読みになった方は多いと思う。大町の小沼さん、志学館の大西さん、そして小生のコメントも載っていた。僕はもう少し違う部分をとりあげてもらえればという気持ちがないでもないが、何はともあれインパクトのある記事であった。山岳部への大きなエールだったことは間違いない。まだお読みでない方は、図書館等で見ていただければと思う。

記事の内容は、昨年度山岳総合センターで行った「県内の高校等の登山活動についての調査研究」の紹介である。この調査研究は、「県内全高校を対象にして山岳関係クラブの有無とそこで『登山（的）活動』がどう行われているのかということ」を調べるために行われたもので、1月１３日発行のかわらばん３３９号でも協力を呼びかけた。私は、最近きわめて感覚的ではあるが、山岳部員の数が微増ながらも増えているのではないかと感じているのだが、調査結果もそれを裏付けるものであったようだ。

調査結果はセンターのホームページ上にアップされており、だれでも閲覧可能なので、ぜひ一度見ていただき、今後の活動に役立ててほしい。

ＵＲＬは、http://www.pref.nagano.jp/xkyouiku/sance/21tyousa%20.pdfである。

見ていただければ、わかるのだが、その中から特徴的なことをいくつか紹介しよう。調査は私学も含む県内の１１１の高校に送付され、回答のあった高校は９７校であり、登山系の活動をしているクラブのある学校は２９校（北信５、東信６、南信７、中信１１）だという。長野県内では今でも４校に１校は登山部があるということになる。今はないが、かつては登山活動をしていたという回答も２４校から寄せられているのをみれば、往時が偲ばれるが、これは致し方ない部分もある。私が掴んでいるところの数字よりも多いというのは、高体連の大会には出てこない学校であっても、山岳部のある学校があることを示している。

ここ３年間の部員数は１３９人、１７０人、１７５人とわずかずつではあるが増えている。この数字をもって山岳部復興の兆しなどというのは早計であるが、少なくとも山に興味を持っている生徒が潜在的にいることは間違いなく、そのニーズに応えるような対応ができるかどうかが、山岳部の存亡の分かれ目となっているように感じられる。ここ１０年間の活動についての問いに対しては「年度によって人数の増減を繰り返しながら活動をしている（活動状況も変化している）」という回答が全体の半数を占めているが、年により若干の上下をしながらクラブそのものは維持されているということであり、たまたまこの３年はその増えるサイクルの中にあるのだろう。僕は、山岳部の将来については決して悲観はしていない。少数であっても、山岳部の門をたたく生徒はなくならない。ただ、そういう生徒がいたときに、たたくための門を用意しておくことが必要なのだ。

アンケートへの回答によれば、日頃の活動や取り組みは総じて低調であるが、これは顧問の力量による部分も大きいと考えられる。顧問が雪のある山へ踏み込めなかったり、

ロープを扱うことに不慣れだったりすれば、勢い活動にも制限が出てくる。その点では山岳総合センターや長山協が行う各種講習会への参加など研修の機会をもっと積極的に活用したいものである。長山協の指導委員会の名簿を見ると、現役の教員で日体協、日山協等の指導員資格保有者は、６人しかいない。もちろん資格がなくても力量豊かな方もいるし、資格があればいいというものではないが、このあたりも気にはなるところだ。長山協の役員としても、この方面も改めて訴えたい部分でもある。「学習活動」や「トレーニング」などを日々の活動の中に取り入れて、さらに日常活動の充実を図りたい。

山には危険があることは紛れもない事実であるにもかかわらず、そのリスクへの対応も学校によりまちまちだ。転ばぬ先の杖としての、保険への加入もクリアしなければならない問題の一つだろう。

その他、自由記述に見られる顧問の抱えるいくつかの問題点を読むと、高校山岳部の抱える共通の問題点が浮かび上がってくる。県大会の顧問交流会の場で、これを肴にみんなで考えるような機会をもてればいいと思う。現状を知ることで対策を立てることも可能になる。調査結果をもとに、活性化のための足がかりをみんなで考えて行きたいものである。体力がある今のうちならそれは十分可能である。

山岳総合センター「高校生登山研修会」への積極参加を

『雪上での歩行技術（夏山の雪渓通過技術等も含む）およびテント設営などの基礎的な技術を習得する』というねらいのもと、５月１５日、１６日の両日山岳総合センター主催の「長野県高等学校登山研修会」が開催される。前述の調査をしたセンターの傘木さんは、最後の「まとめ」のなかでこの研修会に言及し、次のように結んでいる。

> 研修会に参加した生徒のアンケートの中に「雪上でのピッケルを使った基本的な止まり方を学んで、ピッケルって便利だなと思った」というような、実際に体験したからこそ感じることができた感想もあった。新緑と残雪に覆われた５月のこの時期に、たっぷりの雪の中でいろいろな体験ができ、日常生活では味わえない景色が楽しめる長野県の地元の利を活かさない手はない。スキー人口も減っている中、雪上での体験ができるこの研修会は、貴重なものとも言える。また、「顧問の後継者」を育てるという意味からも、「長野県高等学校登山研修会」は格好の研修会になると考える。・・・（中略）・・・「長野県高等学校登山研修会」は、基本的には活動場所を「雪上」とし、今後も継続していきたい研修会と考える。そして、参加者が増え、参加した顧問の先生や生徒達にとって、「また参加したい」と思えるような研修会にしていきたいと強く感じている。

この研修会に参加し、中身を作っていくのは我々自身でもある。センター発足以前の昭和３９年に、中信安全教育研究会を発展させた中信高体連登山部の発足と同時にはじまった研修に端を発し、センターで開催している研修講座のうち、唯一名称も変わらず４０年間続いているのがこの「長野県高等学校登山研修会」だ。これをなんとか存続させたいと思う。懐古主義でいっているわけではない。この研修会がなくなると、高校生がきちんと登山技術を身につける場が長野県からなくなってしまう。そうなれば、山国信州にとって大きなマイナスである。もちろん、６月に県大会があり、そちらへ現地下見にはいりたいというのもわかる。しかし、長い目で見たときこの研修会参加は絶対にプラスになる。一校でも多く、一人でも多くの方が参加して下さることを希望する。